



一天登句の名底詮入りのもの
少くわいひかくも生るにはあら
事は云下へれどもいはるく
とくに御事多儀に減十三年半
がとうやう其の御の承多々歎
せと河の北風涼してのむと
故に平懷をあくとてすとくほ
實れしも解て教すとてのる爲
ある事のとくに御外の風
とくに不傷とちてて追養は
色紫多相手に事の取て確て
其事おこりあらじや

一章句に切字とて今年の秋二十一字
ゆゑを危難の遠離千七百字の
そ為もとし有元とてとせん以てほ
りくかへ一句が井に自の自言あら
て語絶よし則へ切字の大意と布
て五音六十字つまむ切字とて
不争とれども切字とひきゆ
云ふすと其病もれくれ切字と
えれん十八字の切字と大意の定め
やがてうけり一壁ぬまひ縁
えとつよきせぬからこそ
みじの月十日之内をすの文字と有
弗(ふ)くとて翁(おき)しらしきの
うかくとて翁(おき)しらしきの
六十年の間字法書すらりの字が
出でゆきとて翁(おき)しらしきの
成(な)りとて翁(おき)しらしきの
主(ぬし)連字相通ふるを知る

相應す氣のうんどうの事の字 15 漢
一を其處に切るれば其の後へ其の

事は無づて云

去來 あらわす事

丈草

をし

月ちの節し

其角

寄し

系堂の事別

伍の書かれてこれほの文字が書ひ
あらわしてある。漫遊の不やう
そいとほの多く不絶とくも節に自
同いとくも書かれての節なり寧ろ
所と列す事あつてその點に之を

一倒句の事

野と桂子馬にしき時鳥 乞意
鳥鳴子門にしきと云々と將倒す
鷦子まよ風みまの月の多 15 漢

中と詩の倒句のいし杜子美の句

香箱啄餘鷗鵝粒 碧梧接老鳳凰枝

多病の絃鸞鶴の枝と仰きとて將倒

すりと織の作し又青ふの沙汰

うるゝれと射のいふゆきり

あらわすそれととめひんぐわ

背りすれどとめひんぐわの解し

一玄妙の句解

一そやのとれと云ふのとれす

しやどもとれとれとれとれとれ

秋在
秋外

春んとれとれとれとれとれとれ

水としとしとしとしとしとし

スニ世のい城ひしとしとしと

まのうちとお陽あととあひと

かとと仕事ととめの句と云ひとて

発りのゆと云ひぬと云ひて

口更日中セキを云ふて云ふとて

ちり一つもゆうたの文字に云ふとて

足ゆがくとし崩れ湯かの事ひて

歌う歌の絶すきの太井川

空年あすとととだうと詠の唐花

口更日才セキニマテハシテ云亦モト
ナリ一ツモサヌカニ又字ニ云亦モト
ズウルカクシシ筋リ清るの計ひ

歌ノ紙の後モナリ大井川

空年無モナリナリ祐國の唐也
秋の内ナリヒナリヒナリシナリ

御よりし

情すまてさくす人金比羅其角
アラム人金の腰とよかを不拘
此句聖事モヤモヤ句とソ郎
守城の主めとすすめ称とすすめ
名とすすめ

月の月は増月す月 滅

毛も増日へし空も増日へし

一季ナリ春ナリ

村と天宇の沙製

今ノ物よふ事とて作也

小袖ぬりて今之称ひくめも

事もあづき人やあづき

と西御もじひやう源氏の内宿のくわち

和羽もす事に石原川 無

文慶年集列章の時し れいしゆ

鞠子川脚もともほがけ 日

達久三年の七と淳の時もし れいしゆ

歌酒の舞れと病やら流

天慶元年二月の渾れももすに如

酒の酒の酒也と事もすに如

又季行春句の事ももすの春の春句

ももすと季あれとととと春のに如

是の千句の法春三句基二句 秋三句

多古行で十句の春の事もと法又法
セ季と二句はすと八句あると春の
句もすと十句はすとがうと春の乞

金もすと春の法とモリ

海より東方も源氏宿 芝

送千句の法 春三句 夏二句 秋三句
冬二句以上十句の奉書又送 以上又法
也承之二句は 一八句にて承る所の
句加えて十句より多くあらうと見えど
ひきかへり

今しのむすびへ 背筋のうきの
あらわゆるまことにやあつてと
身代やうそくにゆあつてと
しまじのむすびの久きゆゑもと
舞ひよれつまゆのよりとゆ
久きゆゑのよしのよひと
おのれのよひと余もとくあ
ひのく人里を多くとけま
あらえの落きひめ うすい十九
くもとく風やかくおれどよ
又本歌のよみのとと
ひちりんと柳、あらえの
あらえの落きひめ うすい十九
一斎ちて留れ事
おこせぬまとおこせぬまと
郭ふまはく印と海ひで うす
お机一匁ぬつゝりぬで うす
據ひとすくほのくわして十九
にちりて海ひとすくとすくとすく
一斎ちて留れ事
をもがなの押まとつてキオニ或
平句し斎ちて多く虚靈れんじく
うちよ通て
卒歸のねかづき庵にて うす
ねくと通じ卒歸のねかづき庵にて
流れ流りかづき庵にて うす
曲くねの庵へ而しづのうわわく
うのうわくわくへまゆのかくと虚
くわくわくもしきふと
何のうの押まとつてキオニ或
蝶がく漁竿りあひつと 春
波さくと歌を歌ひゆふと 源
走る虛きのわがととととととと
しかかるゆゆひがくへかくと小舟
ひくときよのととととととととととと
漁のりより成りゆすととととと

うかめくもじづる

何のものかともいひぐれ

蝶が飛ばりわらひつと

春

そよの風を報む風下

涼

かのよみゆびかねて川面
ひきまのそ木柳か柳も
波の川より哉やかよと、さう
あうと云ふなり

一眼の句の身方せ事

経は眼を垂り、じよて身も何
にも文もももしりて身も何
ての心のあり相臂お添道
舟比翁も身句の文船、子比
其もくまへに詣徳を
徳入教なしとへ教給と本
寺の西院奉りよ御印して本院の
振ふるふに独りお前し

身や身かをよとの身を身

まく奈良は解説の身もとたま
旅もとつと身とだんと西院の身も
よと身と身と身の身の身

身と身と身と身の身の身の身

身と身と身と身の身の身の身

一眼の身は身ひり、かよひり、
今文文身は身ひりと身身の身ひりと
文身は身ひりと身ひりと身ひりと
身ひりと身ひりと身ひりと身ひりと
身ひりと身ひりと身ひりと身ひりと
身ひりと身ひりと身ひりと身ひりと

身ひりと身ひりと身ひりと身ひりと

身ひりと身ひりと身ひりと身ひりと
父子身ひりと身ひりと身ひりと
身ひりと身ひりと身ひりと身ひりと
身ひりと身ひりと身ひりと身ひりと

身ひりと身ひりと身ひりと身ひりと

一
九
三
九
九

一
九
之
九

御の内やまはすとておもへる奉る
父子才乞一宵の比とて又重くの
三才もこれし奉るの勝いよわぬ
ありゆきも云ひ上り奉つたま
あらゆる事とて奉りあわせます
奉りあわせます
あらゆる事とて奉りあわせます
お合ひあつてゐる所
あらゆる事とて奉りあわせます
お合ひあつてゐる所
あらゆる事とて奉りあわせます
お合ひあつてゐる所

一表兄弟句是奇事

一 斧 句 の 序

卷頭考査ノ如キハシテ
家主全不外れル系別法考
されし、かの春向はるヒトニ
一大事より有ル御事と申候事
又、内輪のオレ火をうへ一通の事
やくうちか御事だ、云ふ事にて
並々不、同意がたりカヘシ本大金水に
事あ水の清濁あり源水溜水有り
雪とスアリテテ下が、
し風又玉筋也小ト有リ、
文字が一通の事御て以て書
あても佛事本末も其の事、
修まつて文字も、文字も清ちる事有
の事故に、事の件と云ひ

一
四
道
北
京

لِكَفَافِي
لِكَفَافِي
لِكَفَافِي
لِكَفَافِي

十九日
上
午
九時半
止
上
午
九時半
止

花やくの春なむ

佳人有才子
梅竹有孤芳

之
花
開
病
死
也

見
國
行
事
大
事
見
國
行
事
大
事

卷之三

花見の夕暮れ
かみのゆふ

争ひれども也と一あいのれどれを

東の御子御子正御子御子御子御子

い様を付う事もあらず
水ノ原ひき

卷之三

此卷之序

一花子吉野、
吉野の花子一花

唐もももももももももももも

さりじくもれり

一花よ吉節はせへたるむすと花の枝
お歌が舞て舞に東を射うる日
え御紅葉に鶴の内へ事
一桜をたゞ伊豆草木桃すら
ひくはなはきうち金刀

寒木は花城すらたよ
一年に花城有り事

底に歌なりとる年ねえ
ゑゝそめひきくればこれ

年年のあらに歌とれるあると
やじ白ば作

一下の句によて留の年

漢文のラニのひきのゆりてわもほ
こゆりし花と来て月と歌て月と
射して花と見て人と歌よけ

来花

詠月

對月

尋人

一すもかうへす歌せぬりへす
ハハハハし春の歌をうらみぬれのを
せり／＼懷歌風もんこ／＼きやく出秋
そひに自らて家わの役をはるす
むちむち春の歌せつれの歌がとうく
しもれもあすうて离すまきまくわ
百遍かくら歌をかねて

一皮肉骨

人とふるふるやう
は月の歌や月の歌
ちかくあすまは歌
肉骨

死と死のほんとし

はやく肉をもす者つゝは
のゆゑに骨と本筋をもつてまた
通風の骨は本筋の二筋と行筋と

肉外

氷

水

火

土

金

木

石

はやく肉をもつて骨をも
通風の骨は肉の二つと行
肉ももとは骨から修理は通
て骨の筋肉に筋肉とつみて
あらわして湘南の骨十
二十脚のものとての筋肉は
骨酒が脇から内までとて
一真年行は年

いのちのよしとよしとよ
體をもとめかねて

あるのとめの筋とよとよ
筋とよとよとよとよとよ

周よとよとよとよとよとよ
とよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよ
とよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよ

家
刀
刀
刀
刀
刀
刀
刀
刀

うそひまく
まんがる筋の四

食ひやあきらめのやうだ
匂ひやあきらめのやうだ
匂ひやあきらめのやうだ
匂ひやあきらめのやうだ
匂ひやあきらめのやうだ

一
五
段
那
物
の
事

又其後數年余亦不復作畫
至是十載未嘗以筆觸於紙
其角也已微喟也用筆十數
而半面美人之有五十年矣
望之如神仙子而苟活者
云何也猶可謂其筆之妙
幸矣八十歲之取徑於印
印之外今復沉鬱不知
今來亦復千餘日矣其筆
亦復如人之所有以至九
十九年之也而其筆之妙
上中下段皆然

一ひよの東西へ和歌連ふ清縣句も
えりと大坂より、仰まゆ時
文、又七年を抱きとて、人を
ふ西よきくみかわぬよわくを
あせりて、あゆみよすの
手ぬる方引すからん人日を
かへりて、あゆみよすの
御、十後后士衣の黒風の筆とまで
がへりて、東よす作とて、東西し
とされど、那得、体のわざとて、大
きの間いわせり、漢和平安みよす
も、對句隔句の志とて、當爾
さるをすやれ、隣のよしとて、東
よすめよの味とて、今
な草をとて、東西わざとて、やう
しよく、ゆきよんよアシキセ
却つて、すくね、あけは道のは今
おきせて、すくね、のけは道のは今
游ともよそく、人の云かで何のむよ
らう今よへ一ねが、ゆりものとば
かすりゆすよれ、すくね
一遠被薦式目、九代源、多度の所
建治二年、獨金る相、みかしとたと
一新、五月、九十代源、元慶院の所
直か又年、二陳、御下、多度の所

一連被高齋の九代源氏多院の所
建治二年より豫金を相手にしたる
一新式目、九十九代源氏處度の所
應永五年二條御下落主之代の
板井周河が合併してあがめ

一朝式目加古代源氏國度を従事
一條源下國の民を立田の本領と作
しりり

一氣武令集、而文代源氏高麗文定元年
杜氏記有相和神として道達院宣
合解くと也解く
そ等と被詛うて源氏高麗本領
楚にとへと書抄と既に本領は
印鑑と備足高財の源氏の振興之を
皆の立園もひびき北村寺外の碑
浦川市地をさきと本領水敷式
連歌の行はせ七句をとすりて云ふ
とこちもとじやくとくらものとし
一北野宮老人と源氏源じ二條御園く
好をぬじ立水外水の音と梵灯庵
の歌をぬじとくに依て紫雲連歌の
梵灯庵より立水の音と梵園の歌を
ち神殿の御連歌の行はせ立水外水
をは是玉露言の雙眼と云うじ
連歌の行は日本文化と云うじ
此の行の作い歌者とあるし
一正梵灯庵の連歌の連人と
人をかくしてゆくと云う
引ひつづきの歌の手先の御歌と
世人をひき取る歌と呼ぶ歌主と云う
紫雲園主と云う宗達と云う立水外水

世人をも感心せしむる如きとて
少く未行ひま

一連被の宗直の権輿に侍ふも應安が済
寧之國をより宗直と云ひ之承外事
あ書と改めかひ侍名史耕生等
つて代連被の義理とする

一應安の頃江州石と寺も其門會

月を風を嘗めよるの處

内腹もなる夜うそすれ 周河

松一本の庭草すりて侍云

ひ阿(お)て侍云家連被一代のゆ
救祐 善阿 美順 信照 良阿木

一代連被死下京新立家連被

・侍公 心敬(信都) 尊順 智溫(陸川)

・宗倡(加賀引能商) 行助 宗祇

・兼裁 専碩 宗砌

・堯惠(杜井花) 宗牧 宗頴(法橋) 順德

・宗長 周桂 昌休

・肖拍(杜井花) 紹巴(達眼)

は代宗直被の會い京治令國取
主第と拂りわざしげ國地主流次
東のち唐故月造りて菊のし
そのうの庭に清湯御屋の沙衰を大
悲のう傷たゞ人高たゞ天陽文し
沙歎寒承ふ九月十日已刻は沙衰を
の因所承とふぞう勘定し

一小節裏向の連被

文承二戌の毛紹已為少僧連被是に
出處の會ひて居て教い白の物を
拂ひて沙衰つて裏向と二の別の事
かづすより一のれの沙衰を承ふまと
其年紹色大同あるまの沙師花もさ
げり沙紹色の古例とて裏向連
被とる有合ひゆべく毎の沙衰

の連被も含む

其年経色大筒赤古の山吹花より
けり多色経色の吉例とて裏の連
続とて有余余りの事とて其事

の連事とて其事

一懷紙、檀紙四枚と二枚、二三事で
様子二枚で又三二事し前しの事
多事はいもすと懐子にて往來
もあくよろの懐子とし

一経色通被背の被元年二百二十首より
えちか（被）其事云、

右被即而是事とて其事云、
古今葉進とて其事云、

古今葉進とて其事云、

経色在列

通之事とて其事云、

一経色宗因の指織、松永良油を今
度長のうちに九條洋周以て云京の
被と連被の事とて其事云、

沙田席うつ時のみ通被にて其事云、

じ時沙田席うつ時のみ古事記一神
をもとし宗因より其事云、

老人大きく通被の事とて其事云、

老人大きく通被の事とて其事云、

宗因紅色と云は印出麻不うつ宗因
減治失許ゆう合同敷とて其事云、

紅子れ通被の事とて其事云、

あらあひひきめり神、富

たこふまことの被子とて其事云、

白絹通被の事とて其事云、

松永良油の指織、松永良油とて其事云、

一石九代清永尾後元和八癸亥年
始兄弟歎うやら佛像とて兄弟の事

其事云、

もとひ衣都と骨ぬけ符とて其事云、

此本の才子連教京郎の口に
一百九代源氏尼後元和八癸未年
始兄弟歎りやうに佛像を兄弟の尊
其剛烈の如き壹形の本姿を仰
ひまか夜都の骨ぬけは久と寺院と
もう千時六十三歳し鑿くに曲
頂をしおりやうに容貌あ
頃長く不老れといふ者祀をゆう
いれ女祖丸母とすと初誕
ちくよ長祖丸ともどりに近侍
ちくよ御の批拂りの因
勝り是をも瑜を重の累のか
ちる柄約やのものいふ御手引
其名をあまとあらじよ叶ひり
拂せし因字とすと諭の安
らしに因天子御凡と云はれり
源氏尼寺迎代和尚の所が今度
らゆる御の御すす御
拂せし因字とすと諭の安
さとすとあらじよのふと金座
御被にゆきあわわるに近人
感ひゆう

一
肩の真珠をね約せらる
手のふくらひで茎と繩の水波の
手筋の下に茎と柄の根のつむじ
がすますと。以てくし常の柄ね
えはくに不満りりゆくねおら柄
まごすとあるよの縁とわとし
まく海ぬく肩くらむとろし六十歳
の里兄弟の内にし骨ぬく津半
北年れをつまら

一株圓芦丸屋は
折固大佛の頭の法事と云ふの
かは後印門主自國と云ふの
中するうちひよゆくはくはくは
は地を奥付の鷹と云ふを情ゆく
今本席と云ふ書院藏と云ふ堂

板國大輔の事の如きと云ふを
かば後御門主自ら御とくよるに
車もりせむすゆひを惜し
は地を奥伊豫の賜とおもひて送
吟咏席とす。相思歌と云ふ堂
に連ばはる千秋をあさり
は後感のいはれまことに、相
即つてと見り。うそへよゆき

はせ小ち通元至後廣多幸

英國と朝桂度し有り今更か
御名とてと御りりてと
有りあくわ被連御の會あり
高田村の会典あり

承應元八月西京御室に至西京
ある報告の會の會に板國

人數一千人ほどの有り

うこはまれの御とて室

鷹馬主らぬたる者とて

一度鷹冠井令法る医家解小村主の

二京方鷹令相手吉通而御内正或中

自儀小京主在治中二仰御内侍姫

也御厚門人しげき丸臣白由

威落の馬頭主相手も

高おもに御京御の喜び難御

墳もじまわらひの爲今よゆ

一派得下がの處の處に度家二年五月

洛陽高知御身に就きて心を南矣

亨とてとま達被の命の通御

王御言人高大御行花瓶文臺式法

の會と御湯車式の會の如

てとくら御形の度の雪 皇唐

太作やまとよその御とて 西京

天やじひととて 金城 三國

一庄の御身如木吉通而御月能
鷹冠井令法る御家解と御門人多

御身酒脣石二京御し西京二條
御太の所とて 編高貴かといづる

一月の事の如きも通じて能
能冠井今宿の御家附と御門人多
徳を酒脣店二郎助と西友三條
橋本の所へゆく。徳高賣つて之の
の雪とわざのうりしげ時節也
人店の傍雲谷等々八雲鶴也
一紙足立桃の先生の一書。自古有
長官集載見記。俳諧背十首。採
家集の字画風く。附屬わづへしま
的作。東京貞室。系譜。二卷。著者
十五日。平元年。午時八十三。附に古事云

一兼虫花の事

ひ居修領と野毛乞乞の事。もとあ
國。桃青の生國あれ。妙。この事
は養よりにはあらず。

養じのもの。ひさ。本と多の爲
ひ。是養堂よりひ向。威脅。うそ。傳
す。お此店比那。お代。おの。多。之
お。ア。で。毎月十二月。も。の。豆。有
舍。身。り。う。今。人。が。と。と。と。と。と。
門。人。自。凄。の。源。出。子。し。中。興。一。浦。れ
祖。と。人。之。縁。七。戌。十。月。十。二。日。年。七。秋
辛。十一。宣。良。雲。五。辰。仲。冬。子。に。算。

一雅陽風解の事

ひの御湯。連。あ。か。く。る。
や。う。と。あ。り。あ。り。ひ。ま。よ。る。
け。や。け。く。ま。燈。あ。と。ア。す。い。ぎ。り
ま。よ。流。み。く。す。や。よ。く。す。い。り。往。之
か。ち。と。て。寛。文。延。寶。の。比。江。櫻。
一。流。延。寶。と。の。寛。歩。ち。け。下。す。
連。禱。よ。づ。ら。る。之。禁。ホ。セ。ト。う。も。る
し。ひ。じ。う。下。長。も。る。

湖。や。石。の。入。海。朝。も。る。
ま。ま。ま。と。目。か。の。家。の。お。草。木。の。
手。足。や。お。と。れ。と。手。の。相。月。古

いひわで長き

湖のやまと入郷の多
きのまくじゆかのまのまくじ
まくじや城のまくじのまくじ
高木其角瓦雪去外宿連ちまく
は風吹せたまくじが鄙は風を吹く
は風ふくらむくらむくらむくら
道明風と稱て六十日は風を吹く
をせぬを結て若葉義と風を吹く
道明風と稱て六十日は風を吹く
一あれうらうらうらうらうらう
速逃れわ被ふかくに
長風屋
風高てねまかき日承
もれめくらどちの晴
月の色月の色月の色月の色
拂吹くとまじ居す風吹くとまじ
ひのわを育つて癒りの郎若
もしめの事半とまじ居す風吹くとまじ
一早駆けひの草林若林若林若林
経度の計度の計度の計度の計度
そくみそくみそくみそくみそく
多めの風吹くとまじ居す風吹くとまじ
柱田祐氏のかけきのあやめ
大口立つて

一元被木の山家井其角桂承木の山家
湯方川牛乳の鶴よかと、もう正大般
りゆうて社とくとくとくとくとくとく
あびれりくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
あらや田を立つてのびくとくとく
計度の計度の計度の計度の計度の計度
一元被木の山家井其角桂承木の山家
湯方川牛乳の鶴よかと、もう正大般
りゆうて社とくとくとくとくとくとくとく
あびれりくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

まよひの（管）あまわ
八重子蝶 源
はらひにまよ井の水
もて小印す者
かくはくとゆりし。半
そのそ正直一心以
てかまくのれ。琴叶の感應あり。今幸
むせ一物有。口文口皮也。未第
も何處、出門
人所不思ひ

省延享三年丙寅十月
承恩院

